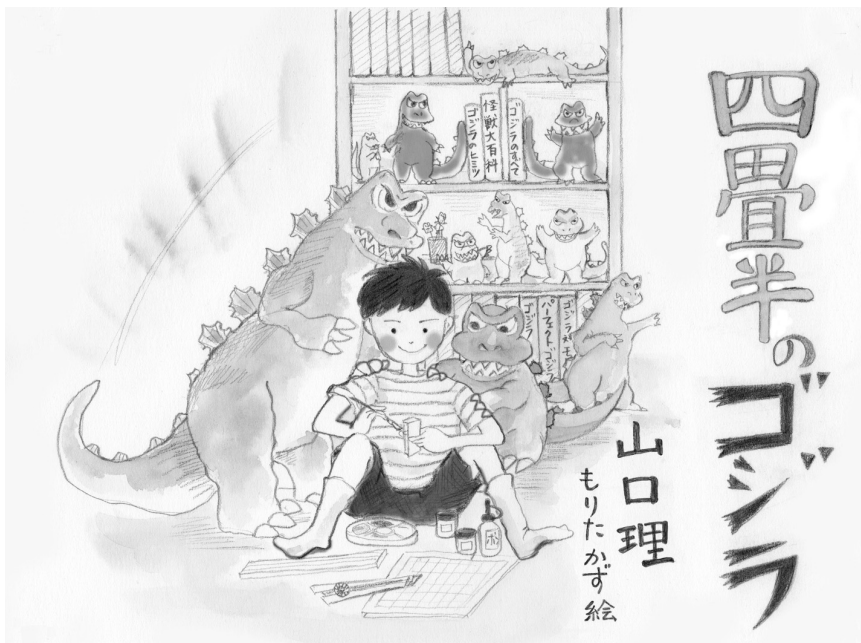


# 四畳半のゴジラ



つい、視線が合ってしまった。

「はい、小林君。発表してちょうだい」

先生が拳銃みたいな人差し指をぼくにに向けた。

「ほら、指されたぞ。早く立てよ、瑛太」

班のみんなにせかされて、しかたなく椅子から腰を浮かせる。

「えっ、あ、あの……」

なんだまたかよと、どこかで声が出た。ぼくは今、班で話し合った結果を発表するという、とんでもないピンチに立たされている。

「もういいわ、時間のムダ。それじゃあ、六班はどうかしら」

あっさりスルー。いつもの光景だ。ぼくは瑛太。小林瑛太、小学校五年生。そんなぼくのことをみんなは言う。根性なし、根クラ、消極的、引っ込み思案、女の腐ったの……。どれも当たっていると思うけど、最後のヤツだけは差別用語ってもんじゃないの？

みんなの言うことは、悔しいけど当たってる。だから何だ。その何が悪い！

「おっ、なんだこれ」

まずいやつがやってきた。同じクラスの光希だ。こいつ、やたらと体がでかい。先生の身長なんか、とっくに越しち